



いりさわ・たかし ● 2017年4月に第19代学長に就任。1955年広島県生まれ。1986年龍谷大学文学研究科博士課程仏教学専攻単位取得退学。龍谷大学文学部講師、同助教、同大学経営学部教授、同大学文学部教授、2013年龍谷ミュージアム館長、2015年同大学文学部長。専門は仏教文化学で、仏教遺跡調査や壁画復元事業に従事。



荒波に挑むトップ 私の改革論

龍谷大学・学長
入澤 崇

No.21

大学を「通過点」ではなく 「学び続ける姿勢」獲得の「場」へ 仏教精神にのっとり、「利他の精神」で人間教育を追究する

人生の土台をつくる 大学教育の重要性

高等教育に求められているのは、その国の未来を担う人間の育成です。しかし、日本では従来大学は、社会に出るための「通過点」という認識でした。高校生にとっては、大学に入学することがゴール

ルになっており、入学後の学生の意識は、効率的に単位を取り、資格を取得し、無事に大学生活を終えて社会に出ることに向かっているのが現状です。

このような「通過点」としてではなく、人間育成の「場」としての役割を果たすには、学生にとって大学がその後の人生の土台をつ

くる場所になっていなければなりません。この土台とは、「生涯にわたって学び続ける姿勢」のことです。学生にこの姿勢を身に付けさせるこそが、大学教育の最も大切な役割だと言えます。

土台づくりで重要となるのが、初年次教育です。入学直後に、高校までの「勉強」から大学での「学

助け合いの精神は、大学の教育プログラムを通して十分に育成可能です。基本的な考え方を伝え、実践の場を用意すれば、学生は自らの力で学びとっていきます。

本学が「浄土真宗の精神」を建学の精神にしているように、日本の私立大学には、それぞれに建学の精神があります。その精神に立ち戻って、各大学がオリジナリティに富んだ人間教育のプログラムを提供していけば、日本の私立大学はもっと活性化していくこと

仏教思想を基に 学びの世界を広げる

このような学びへの姿勢や助け合いの精神を育むため本学では、初年次教育の充実を注いでいます。そのための取り組みの一つが、1年次に全学部で必修科目としている「仏教の思想」です。ここではまず、自分自身を省みて、心のありようを問うことを学びます。その中で学生は、自分の日々の判断が心の持ち方で変わることに、好き嫌いや自分勝手な思い込みで判断していることなどに気づきます。

こうした気づきは学問をするときにも生きるものです。関心を

持っていることだけに耳を傾けていては自分の世界を狭めてしまいます。心を開いて、さまざまな科目を学び、広く他人の話を聞き、新しいものを受け入れることで、新たな世界への扉は開かれます。

また、仏教には「利他」の教えがあります。これは、「自分以外の者が関わり、支えてくれてこそ今の自分」に気づくことでもあります。本学には、障がいのある学生の勉学をサポートする学生グループをはじめとして、他者のために活動する学生が少なからず存在しています。排他的な風潮が強まってきている世界情勢を考えると、利他的な人間の育成は、一層その重要性を増していると言えるでしょう。

主体的な学びを促す ラーニングコモンズ

プログラムだけでなく、学ぶ場づくりも重要です。本学では、深草、瀬田の両キャンパスに、龍谷大学ラーニングコモンズを設置し、主体的な学びを促しています。コモンズは、機能別に、学生のコラボレーションスペースや成果発表の場である「スチューデントコモンズ」、国際交流や語学力を高める学習スペース「グローバル

問」へと、学びに対する意識を変えていく――つまり、主体的な学びによって、自分で新しい世界の扉を開いていく学問の醍醐味に目覚めさせることが必要なのです。このことは、大学での4年間はもちろん、その後の長い人生において、学び続ける姿勢を維持することにもつながっていきます。

助け合いの精神が 相互理解を促す

初年次教育では、学び続ける姿勢と同時に、助け合いの精神を育成することも不可欠です。世の中には、一人のできる仕事はありません。そのため、自己中心的な考えから脱して、他人と協力して物事を成し遂げていく人間へと成長させることが必要です。こうした助け合いの精神は、異なる能力や考え方、身体的特性、言語文化、ジェンダーを持つ人に対する理解と共感につながります。

中でも、外国語が介在するため特別なことのように思われがちなグローバル化への対応の根底にあるのは、他者への理解と共感です。その意味では、大学のグローバル化においても、助け合いの精神は重要な鍵を握っていると言えるでしょう。

主体的な学びを活性化させるには、教員も従来の教授法から脱する必要があるとあります。各学部では定期的にFDを開催し、学生の主体的な学びを促す教授法について取り組みの共有を行うなど、指導の改善に努めています。

学生同士、学生と教職員が互いに影響し合い、高め合いながら、その波動が社会へと広がっていく「波動を起こす大学」の実現――それが大学改革を通じて私がめざすものです。2020年の姿を描いた第5次長期計画は完成に向かいつつあるので、その先の大学像を描くことが私の務めです。そのためにも、傾聴と対話を重んじ、学生も教職員もこの大学でよかつたと思えるような大学づくりを進めていきます。



取材・文/仲谷宏 撮影/岸隆子